猟奇殺人鬼の変奏曲

三月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
猟奇殺人鬼の変奏曲

【Ｎコード】
Ｎ５４３４Ｄ

【作者名】
三月

【あらすじ】
本編「猟奇殺人鬼の交響曲」が、知らない間にシリアス調になってしまったので、別個にコメディパートを設立・爆発させることに致しました。若干頭の悪さが上がっておりますが、本編とのリンクもございます。よろしければ、どうぞ！！

はじめに

【本編のあらすじ】

修道士見習いのキオ・コッローディ少年のもとに、ある夜、女神が現れました。

それは、彼が信仰しているカラード教の青の女神様でした。

女神は「ある人間たちを導きなさい」と、キオに啓示を与えます。

ところが、彼の導く相手とは、世界に悪名を轟かせる６人の「猟奇殺人鬼」だったのです。

聖書の１ページから、彼らを導く手立てを考え出したキオ少年は、啓示の命令をまっとうするべく、猟奇殺人鬼と共同生活することになりました。

詳しくは「猟奇殺人鬼の交響曲」をどうぞ。

【変奏曲用キャラクター紹介】

キオ・コッローディ（実年齢１５歳）

心優しく、正直な、修道士見習いの少年。
茶髪に鳶色の目、ソバカスと尖った鼻が特徴。
いまや猟奇殺人鬼たちのマスコット的存在。
本編より若干ツッコミが激しい。

ジル・ヴィクトール・フランスワ・ド・ブルノー（目測年齢２７、８歳）

変態その１。
金髪碧眼の美丈夫だけど、黒髪女性の飼い殺しが趣味。
ナルシストにして自意識過剰、高慢な、性的にフリーダムすぎる変態貴族。
本編よりアホ。

アイリーン・ネルソン（目測年齢２４、５歳）

変態その２。
褐色の肌に灰髪の美女だけど、食人鬼。
露出癖あり、支配欲強し、女王様気質。
本編よりマトモ。

ペーズリー・ハワード・ゲイン（目測年齢１０代後半）

変態その３。
人見知りが激しすぎるのか、死体愛好者。
本物の猫耳が付いた皮袋を頭に被っており、上等の革長靴をはいている。
ぼさぼさの黒髪に緑眼。（↑唯一見える部分）
本編より挙動不審。

リジー・ドット（目測年齢１４、５歳）

変態その４。
金茶の髪にパッチリ赤眼の、カワイイ加虐的愛好者。
被害者の悲鳴や命乞いが大好き。
大きな鎌の入ったトランクと、赤いフードが特徴。
本編よりサディスト。

ディーン・クレンペラー（目測年齢２０代前半）

変態その５。
いつでもどこでも空気を読まないハッピー野郎。
ツバ広の帽子に、羽飾りだらけの全身タイツを着た、人さらい。
ラトゥールの街から１３０人の子供をさらった伝説持ち。
本編よりお子様。

グラン・ジンジャー・ボーデン（目測年齢不明）

もう人間かどうか怪しい、無差別殺人鬼な不死身の大男。
全身包帯に覆われており、ぼろぼろの衣服を身につけ、大鉈を所持している。
常に無言だが、読み書きはキオに教えてもらった。
変態ではない。
本編より弄られ役。

J・A・ジェボーダン

北方機動憲兵隊の大佐にして、憲兵隊のアイドル。
銀髪に青みがかった銀の瞳の４０代だと思われがちな３０代男性。
長身、鍛え上げられた体躯、傷跡のある強面。だけど、アイドル。
憲兵隊内のアンケート調査で３年連続「抱かれたい男ナンバー１」だが、憲兵隊の８割は男性という複雑な現実に直面している。

スコール・ソリュエラ

北方機動憲兵隊精鋭部隊「ブレーメン」のひとりで、准尉。
赤頭にハシバミ色の瞳のジェボーダン大好き青年。
大食いなため、人のおかずをよくかっさらう。（被害者は大抵フェンリル）
常にハイテンションで、バカを装っているかと思えば、結構鋭い一面も。
でも、やっぱりバカ。

レト・カルターニャ

同上のひとりで、少尉。
黄土色の髪と瞳をもつ、ジェボーダン大好き女性。
大佐の生パンツは安眠グッズだと称する、自覚のない変態。
ただし、他の男性憲兵隊員にはものすごく厳しく、視界に入っただけで舌打ちされる者もいる。
料理が壊滅的に下手。

フェンリル・バーロウ

同上のひとり。
黒髪、紺の瞳、長身の美形男性。
低血圧にして注意力散漫なため、常に額をどこかにぶつけている。
コミュニケーション能力が低めで、ペットボトルについたフィギアや、抽選で小物をくれたりするキャンペーンシールを集めるのが好きな、引きこもり野郎。

マーナガルム

同上のひとり。
タテガミのような金髪と一重の目が特徴のヤンキー風青年。
ピアスやら、目元の縫合後やらが、いかにも不良っぽいが、わりと

常識人。
なにかと血の気が多く、斜に構える部分があるが、やっぱり常識人。
大佐に次ぐ苦労人な、どこまでも常識人の域を出ないツッコミ要員。

ハティ・ノードヴェント

機動憲兵隊東支部の中尉。
緑の瞳と銀縁眼鏡の爽やかな天然好青年。
個性的な憲兵隊員のなかで、仲裁役として地味に活躍。
スコッチと並び、「二大双璧」として名高いらしいが、詳細は不明である。
ガーデニングが好きだが、育てた花が一度も咲いたことがないという悲しい過去を持つ。

随時追加予定。

第1楽章　ピヨの逆襲

ギルシアンブリジット（国）

ラチュアドドール（県）バートン（郡）　ルベルコンティ

１０月２０日（月）

１０月１８日の記念すべき夜。

女神様から啓示を頂いたキオ少年は、そのとおり、殺人鬼の導き手を引き受けることになった。自分以外の全員が猟奇殺人鬼だというのは、さすがに不安だが、聖典で導き方も分かったため、わりと気楽なキオである。

猟奇殺人鬼のひとりである、ジルのお屋敷に、（キオも含め）７人全員住むことになってしまったが、元来庶民生まれのキオには、彼の広すぎるお屋敷が落ち着かなくてしょうがない。

そういうわけで、キオは、屋敷の探検も兼ね、長い廊下を一人歩いているのである。

さて、ある部屋を通り過ぎた時、なにやら、ひそひそ話し声が聞こえてきた。この屋敷に今いるのは、キオと猟奇殺人鬼だけのはずだ。

ひょっとして、猟奇殺人鬼の皆さんが、僕の殺害方法とか死体遺棄方法とか話してるんじゃ……心配になったキオは、声が聞こえると

思しき部屋の扉に、耳をくっつけた。

盗み聞きなんて関心しないでしょうけど、見逃してください、女神様。

「というわけだけど、どーすんの」

「すごいハショり方するね、アイリーン」

アイリーン、てことは、灰髪の食人鬼さんか。話してる相手は、快楽殺人鬼の代表リジー・ドットみたいだ。

「あの修道士、どう思う？」

うわ、いきなり核心をつく質問だなぁ……。

「小さいと思う」

まぁ、小さいけどさ……僕の印象って、その程度なのかな。

「可愛いと思う」

なんだろう……イヤというか、危ない感じがするなぁ。ジル・ヴィクトール……なんとかさんに、ああ言われると。なんで、こんなに名前長いんだろ。

「オイラ、分かった！」

手をポン！と打つ音。この声は――ディーン・クレンペラーだな。

「茶色いと思う！」

なんだ、その感想！？もう、人間に対しての感想じゃないじゃん！

あ、髪の色のこと！？

「ああ、確かに茶色いな」

「うん、茶色い」

茶色さは、どうでもいいよ！もっともらしい同意すんな！

「そういえば、名前なんだっけ、あの修道士」

「えー……ティ……ミロだっけ」

「え、そんなんだっけ？そんな舌を巻く発音、入ってたっけ」

キオですよ！つい昨日、自己紹介したじゃないですか！というか、もう2日目なんで覚えて欲しいんですけど。

「なんか、こう……ペロ？」

犬！？

「それ、違う。もっと、こう……ペスとか」

だんだん離れていってる！誰でもいいから思い出せ！

「待った、待った、出てきそう……もう、この辺まで出てきてるんだがな」

頑張って思い出してください、ジル！変態貴族って思ったこと、訂正しますから！

それ、思い出せ！キーオ！キーオ！

「わかった、ポロだ！」

この変態貴族ぅぅぅぅぅぅ！！思い出してその程度か！

「あ、近い！それ近いよ！」

近くねぇよ！かすってすらいないよ！

「でも、ポロじゃなかった気がするわ……そもそも、パ行じゃなかったような」

ナイス、アイリーン！そのまま軌道修正してください！

「じゃあ、ピヨで」

じゃあ、ってなんだよ！パ行じゃないって言ってるのに、何故なおも執拗に半濁音を入れようとしてくるんだよ、変態貴族！

「あ～うんうん、ピヨっぽい！」

「言われてみれば、ピヨっぽい」

な、なにそれ、満場一致でピヨっぽいの！？嬉しくないイメージが固定しちゃうだろが！

「ピヨでいいか、もう」

「キオ」

「そうね、思い出せないし」

「よかった、解決して！」

え！？今、答え言ってる人いたじゃん！カタコトの……ペーズリー・ハワード・ゲインだ！

「それで、善行をしないといけないわけだよね」

あああ、スルーされた！名前ピヨじゃないんだけど、もういいや！

「いいことなんかしたくないけど……そうしないと、女神の呪いがとけないんでしょ？心臓が鉛になって死ぬなんて、そんな屈辱的な死に方、絶対やだ」

さっき、リジーが言ったように、６人の猟奇殺人鬼たちは、青の女神様によって「善行を積まないと心臓が鉛になる」という陰険な呪いをかけられている。それを、キオが、サポートしなければならないわけだ。

「今まで、イイコトしたことある？」

「悪いことなら、数限りなくあるんだけどね」

でしょうね、殺人鬼だもんね。

「自販機の釣り銭出てくるところにガムとか」

「ジテンシャ　ドミノ　タオシ　トカ」

「市民プールで放尿とか」

「マーケットのミンチを揉みまくるとか」

「列車内で、女子高生を終日なめるように観察とか」

スケール小せぇぇぇぇ！でも、なんかかんか人の迷惑になることしてる！人間としてやっちゃいけないことしてる！

よい子のみんなは絶対マネしないでね！

「やっぱ、なんでもコツコツ積み重ねていかないとね」

「そうよね、千の悪事も、まずは小さな一歩よ」

正しい！使い方は正しいけど、方向性を間違ってる！

大きな間違いに気付かず、なにやら、和やかに笑いあっている猟奇殺人鬼たち。

キオは、扉から耳を離し、立ち上がった。これ以上聞いてても、なんか無意味な気がしたからだ。

「明日から、大変なことになるだろうなぁ……」

彼は、今作ってある祭壇を、更に増やしてやろうと決意した。

今夜の嫌がらせも、かねて。

第1楽章　イタズラの代償

１０月２２日（水）

昨日、２０日夜の嫌がらせもかねて、たくさん祭壇を作った。

すると、祭壇画の青の女神様の絵、すべてに、ヒゲが書き加えられていた。

犯人を突き止めようと思う。

『キオの青春サヨウナラ日記』より

「はい、みなさん、集合――――！！！」

キオは、女神の異変に、朝の礼拝で気付いていたが、集合をかけたのは昼過ぎにした。礼拝は朝5時なので、そんな時間帯にたたき起こすと、さすがに殺されると思ったからだ。

「誰がやったんですか、コレ！」

キオが、青の女神の絵を、びしっと突き出すと、誰ともなく笑いが広がった。

「笑っちゃダメ！」

それでも、笑い止まない。

「追加呪いを、かけられますよ！」

みんな、口元を引き結ぶ。

「いいんじゃない？なんか、面白いし」

「面白い祭壇なんて、祭壇じゃないです！それは、もう祭壇以外のなにかです！誰がやったんですか！」

教会からの借り物に、こんなことをされてはゼペット司祭様にも、青の女神様にも申し訳が立たない。キオの並々ならぬ様子に、みんな、なんとなく視線をそらす。

もちろん、名乗り出る者はいない。

「分かりました。じゃあ、みんな目をつぶってください」

キオの言葉を、不思議がりながら、猟奇殺人鬼たちは目を閉じる。

「みんなの前で名乗るのが恥ずかしいなら、僕にだけ教えてください。女神様にヒゲをつけた人は、黙ったまま手をあげてください」

さて、一体だれがやったのか。

そろそろと、ひとりの手が上がる。

……いや、それはない。

1番ない、と思っていた人物である。

グラン・ジンジャー・ボーデンが、女神様にヒゲを書き足した？

「それは、ないだろぉぉぉぉぉぉ！！！」

キオの絶叫に、みんなが目を開く。

「おかしいですよ、これは作為的なものを感じますよ、僕は！！」

歩き回るキオに、声がかかる。

「ねぇ、もう犯人分かったんでしょ～？」

「部屋に帰ってい～い？」

「イ〜イ？」

キオの直感が囁いた。

犯人は、こいつらだ……この3人だ、多分。

リジー・ドット。

ディーン・クレンペラー。

ペーズリー・ハワード・ゲイン。

3人は、へっへっへと、あくどい顔で笑っている。ペーズリーに関しては顔が見えないが。

「……まだ、犯人が分かったわけじゃありません」

「なんで？だって、グランが――」

「はい、そこぉぉおお！！」

キオのものすごい反射神経に、ビクーン！とペーズリーが猫耳を立てた。

「なんで、目をつぶっていたのに、グランが手を上げたと知ってるんですか」

指されたリジーは、一瞬、しまった、というような表情をした。

「もちろん、僕は疑っているわけじゃありません。でも、グランがこんなことするとも思えません。むしろ、こういうしょーもないイタズラに一番反応しそうなリジーとディーン。そして、猫耳で疾(やま)しさを表現したペーズリーに話を聞きたいですね」

疑っていないと言いつつ、名指しのキオ。

3人は、当然、揃って潔白を訴え始めた。

「オイラじゃないでーす。グランでーす」

「そうそう、だって、グランがやれって言ったんだもん」

「グラン　ダモン」

なんだ、この性質の悪い小学生みたいなのは……。

というか、リジー、自分がやったことは自供しちゃったよ。

「あのね、リジー。グランは、お話しないでしょう？どうやって命令されたんですか？」

キオに至近距離で詰め寄られ、リジーが目を泳がせる。

「……ね、念波で」

「……」

「……」

ディーンと、ペーズリーが、それは無理がある、と言いたそうな目をリジーに向ける。

「や、待った、念波ではないよ、うん。それはね、わたしもムリがあるなーって分かってから。えーと……手話で命令を……手話できたっけ、お前」

リジーに問われ、グランはふるふると首を振った。

「……筆談は？」

再び、ふるふると首をふるグラン。

「コミュニケーション方法ないのかよ！お前ができるのって、『はい』と『いいえ』だけ！？」

こくんとグランが頷く。

「……」

キオは、リジーが、どういう対応策をとるのか、静かに観察している。

ややあって、リジーがつぶやいた。

「……キオ、じゃあ、念波で」

「今の会話聞いてたら、完全にリジーが犯人じゃないですかぁああ

あ！！」

「くっそう！バレたか！」

「くっそう、じゃないですよ！なんなんですか、その小細工！いたずらだけならいざ知らず、嘘をついて、人に罪をなすりつけようとするなんて、言語道断！罰則です！」

「そんな、キオったら大胆……」

「なんで、ジルが嬉しそうな顔するんですか！？」

アイリーンが、隣で汚物でも見るような顔をしている。

脊椎反射が下半身に通じているんだろうか、この人は。

「リジーは、女神様のヒゲを落としておいてください！」

「でも、ディーンとペーズリーもやってたし！」

傍観者に回っていた、ディーンとペーズリーが、ぎくりと肩を揺らす。

さすが、赤ずきん。仲間を売るのが早い。

「リジー、人がやってたら、自分もやっていいんですか？じゃあ、リジーは、ディーンが車にひかれたら、一緒にひかれるんですか。ジルが全裸で踊ってたら、一緒になって踊るんですか。そんなことしないでしょう？」

「え、なんで、私？」

キオは、ジルの問いを華麗に無視した。

「3人で仲良く、直してください」

高らかに宣告され、3人は文句を言いつつも、従う意思をみせた。

「でも、油性ペンで書いたから、落ちないよ？白い絵の具で隠したら、白ヒゲになるし」

「肌色の絵の具で隠せばいいじゃないですか」

「赤は？」

「それじゃ、鼻血になるでしょ！変なこだわりはいいですから、肌色でお願いします！」

絵の具なんて手元にないから、まず買いに行かなければならない。しかし、余計な出費を嫌うキオは、絵を直すかわりに、ホールの掃除を命じた。

「あーあ、グランのせいで」

ディーンの言葉に、無表情な大男が、なんとなく申し訳なさそうにする。

「人のせいにしないの！」

リジーが、ひそかにグランを蹴っている。

「人を蹴らないの！罰則追加です！」

抗議の悲鳴を無視し、キオはディーンとリジーに、皿洗いを命じた。

ここは、まるで、保育園か小学校、あるいは動物園です。

ゼペット司祭様、僕は今日も頑張っています。

【本日のキオに対する好感度】

リジー　＋1（怒られたけど、こいつ面白い）

ディーン　＋1（怒られたけど、かまってもらえた！）

ペーズリー　－1（オコラレタ）

ジル　＋1（むしろ、怒られたかった）

アイリーン　－1（しょうもないことで、いちいち呼び出さないで）

グラン　＋2（なんか、かばってもらえた）

第1楽章　聖典授業

１０月２５日（土）

全員分の聖典を用意し、こっそり部屋に置いてみた。

残らず、歯形がついているのはなぜだろう。

『キオの青春サヨウナラ日記より』

「今日から、聖典を読んでもらいます。これは、心を豊かにするため読むのであって、別に皆さんを精神的に追い詰めようとか、そんな思惑はありません……だから、悲しい顔しないでください」

猟奇殺人鬼たちは、大嫌いな食べ物を目の前に置かれた、子供のような悲しい顔をしている。そんなに聖典がキライなんだ、と、キオは改めて生活の違いを感じた。

「聖典は、ちょっと……アタシ、聖典を読んだりすると、頭が痛くなるの」

アイリーンが、これ見よがしに溜息をつくと、他の連中も意見し始めた。

「そーだねー、なんか具合悪くなっちゃう」

「カラダ　ダルダル」

「なんか、もうすでに熱っぽい！」

「カビが生える」

「なんか、最後のおかしくないですか！？嫌いだからって、そんなワガママ言っちゃダメですよ。結構面白い話もありますからね。そんなに毛嫌いしないで」

やんわりたしなめられ、みんな、まぁ、しょうがないなという気になる。せっかく、一生懸命やってるんだから、付き合ってやろうと思い直したのだろう。

「どこにしようかなぁ……じゃあ、この『幸いを分け与える旅人』にしましょうか」

ひとりの旅人がいた。あるとき、旅人が歩いていると、向こうから男がやってきた。旅人は渇いた男に水を分けてやり、食べ物を分けてやった。旅人の水と食べ物は、なくなった。

また、別の道で、オレオの商人が倒れているのに出くわした。旅人は介抱してやり、すぐに町の宿へ連れて行った。旅人の路銀は、なくなった。

また、別の道で、川を渡れずにいる少年を見つけた。旅人は、少年を背負い、川を通らせてやり、濡れた服のかわりとなるよう、上着を渡した。ついに、旅人は着物すら、なくなった。

しかし、旅人は満たされた。

「オレオっていうのは、お金持ちが多かったせいで、当時、嫌われていた種族です。つまり、旅人は意地悪せずに、助けてあげたわけですね」

ふんふん、とわりと真面目に聞いている猟奇殺人鬼たち。

「さて、最後に満たされた、とありますけど、これはどういうことだと思いますか？」

グランが、自分のおなかを撫でる。

「いい気分になったってことじゃないの？」

「そうですね。おなかがいっぱいになった時みたいに、気分がよくなったってことでしょうね。ふたりとも合ってますよ」

褒められて、えへへ、と顔を見合わせるグランとディーン。

「イッパイ　アゲチャウ　ナンニモ　ナイ」

ペーズリーは、ウーンと首を傾げた。

「タスケル　イッパイ？」

「あぁ、なんにも持ってないのに、どうして気分がよくなるかですか？」

ペーズリーが、うんうんと頷く。

「難しい質問ですね……なら、逆に自分に置き換えてみましょうか。気分がよくなるかどうかはともかく、みんなだったら、困っている人に、何をしてあげますか？」

「ナンデモ　イイ？」

「なーんでもいいですよ。何に困ってるかも考えてみてくださいね」

ペーズリーが、一生懸命考え出した隣で、全く考える気のない男がいた。

「何をするか、ねぇ……相手が女性なら、喜ぶことなんて、すぐ分かるんだが」

ジルの指先が、さりげなくキオの手をたどる。キオは、しばらく張り付いたような笑顔のままだったが、ふいに反対の手をぐっと握り締めた。

パァァァァァアアアアアアア――――ンン！！！

どさり、と声もたてず、ジルがテーブルに突っ伏す。心なしか、焦げ臭い。

え、なに、これ夢？

「……キ、キオ、それは一体」

アイリーンの言葉に、キオは手元のスイッチを掲げ、足元にある機械を示して見せた。

「教育的指導補助機械１号のプラズマショック君です。１５歳以上の方にとって、不適切発言かつ不適切な行動をとった場合などに、この機械から、みなさんが座っている座布団に、電気ショックが送られます」

「……はい？」

「座布団っていうのは、その薄っぺらいクッションのことです」
「いや、そっちじゃなくて……電気ショック……？」
「電気のショックです」
「分かってるわよ、んなことは」
「電気の衝撃です」
「別に日本語訳してくれなんて言ってないわよ！そうじゃなくて！なんで、そんな危険な装置持ってるの！？」
キオは、聖典に挟んでいた手紙を、ひらひらと振った。
「ゼペット司祭様が、なにかに役立てなさいって、送ってくださいました。司祭様のすることに間違いはありません。きっと、みなさんを指導するのにスゴイ効果を発揮してくれますよ」
と、とんでもないもの送ってくれたな、司祭……！！
青ざめる5人（一人は気絶中）に、キオはにこやかに微笑んだ。
「やだなぁ、みなさん猟奇殺人鬼でしょう？これくらい、大丈夫ですよ」
「もう、すでに大丈夫じゃない人が、横たわってるんだけど……」

それに、猟奇殺人鬼は、あくまで猟奇的な殺人を犯した人間というだけで、そんな怪物的な存在というわけでは……。

不安げな様子を見て、キオは慌てて手を振る。

「そんなに心配しないでくださいよ！さっきのジルの言動はダメでしたけど、教育的指導には三段階ありますから」

三段階？

「あまり適切でなかった発言の場合は『注意』程度です。やや適切でなかった場合は『忠告』、全く適切でなかった場合は『警告』となり、不適切２回目で『宣告』、つまりジルみたいになります」

誰もが、倒れたままのジルを見つめ、ごくりと喉をならす。

プスプスと煙をあげる状態になると、そうおっしゃるんですね……。

「ちなみに、『警告』後は、塩水を飲んでもらいます」

まさかの感電率アップ……！？

「これも、みなさんのためを思ってですから！いわば、愛の鞭ですからね！」

拳を握って、熱く語るキオを、アイリーンが制す。

「そんなギャンブルみたいなことしたくな」

「あ、あんまり不用意に立ち上がらないでくださいね。まだ使い方が不安定なもので、うっかり『宣告』スイッチを押してしまうかもしれません」

立ち上がりかけたアイリーンは、無言で腰を下ろした。

な、なにこの恐怖政治……！！

「さて、じゃあ話を戻しますね。なにかしてあげるっていうのは、難しいかな？質問を変えますね。この話は、一体なにを表したかったのでしょうか？」

「え、えぇ～と……」

こんなに真剣に考え込んだのは、初めてかもしれない。それぞれ、必死に思いを巡らせる。掌が汗ばみ始めた。

「だから、いいことすれば、自分も幸せになるってことでしょ……？」

「あ、いいですね、その答え！聖典の解釈には、はっきりした答えなんてありませんから、ディーンの答え、十分１００点満点です！」

他になにかないですか？とキオに目で促され、リジーが肩をすくめる。

「ようは、人にしてもらいたいことを、自分も進んで行え、ってことだよね。そうすれば、見返りを求めずにいても、自然と善行による心の財産が、積まれていく。財産は、人間関係だったり、愛情だったり、様々だろうけど」

リジーの答えに、キオは感動で、声を詰まらせた。

「すごい！リジー、そこまで読み込めるなんて……僕、心からの拍手を送りたいです！！」

リジーは、満更でもない顔だ。しかし、調子に乗るのは、彼女の悪いところ。

「いや、でも、まぁ、心の財産ってのは、旅人の自己満足のことだろうけどね」

パァァァァァアアアアアアアア――――ンン！！！

「リジーィィィイイイ！！」

そのまま黙ってりゃいいものを、余計なことを！！

「そういう言葉を使うのは、どうかと思いますよ、リジー」

「……はい、すいません」

不死身と呼び声も高いリジー・ドットは、『忠告』レベルでは倒れない。でも、お尻が痛かったのか、ちょっと涙ぐんでいる。

「人によいことをしたから、自分も気分がよくなった。それを、自己満足というと、なんというか、馬鹿にするというか、客観的ぶって蔑んでいる様に聞こえます。少なくとも、喉が渇いてる人を助けたことは、自分だけの独りよがりじゃないです。人様にそういうこと言っちゃいけません」

「ごもっともです」

快楽殺人者の代名詞であり、故国では童謡にまでなった凶悪犯罪者、殺人鬼フリークの間で熱狂的な人気を誇っている「赤頭巾」は、教会ネズミ相手にあっさり陥落した。

青の女神信者って、みんなああなっちゃうのかしら……

今更ながら、宗教の恐ろしさを思い出すアイリーン。

「じゃあ、あとは、この紙に、感想書いてくださいね。本当はもっと話し合った方がいいんですけど、そろそろ夕飯の支度しなくちゃ」

キオが配る小さな紙には、爆発した果物のようなものが描かれている。

「なに、このイラスト？オレンジ？」

「それ、ゼペット司祭様の似顔絵です」

それは、別に、なんの他意もないイラストだった。

キオは絵が下手だから。

しかし、そのことを、まだ知らない５人は恐怖に震え上がった。

『宣告』レベルは、こうなるんだ……と。

【本日のキオに対する好感度】

リジー　－2（あの小僧、許さん）

ディーン　－1（怖すぎる）

ペーズリー　－1（イツモノ　キオ　チガウ）

ジル　＋1（あれ？ひょっとして照れてる？）

アイリーン　－1（好感度とか、もうそういう問題じゃないわ）

グラン　＋－0（びりびりしなくて、よかった）

第1楽章　朝の風景

１０月２６日（日）

みんなの扱いが徐々に分かってきた。

『キオの青春サヨウナラ日記』より

「おはようございます」

快活に挨拶するキオを、アイリーンが眩しそうに見る。

「元気ねぇ」

言いつつ、大きな欠伸をひとつ。

眠たげながらも、常に一番乗りで、キッチンを覗くのは彼女である。

次に、ペーズリーが、ペタペタ降りてくる。当初は起こしにいっても、暖かい寝床を離れなかったが、今は自分で起きてくる。多分、夕飯が早いため、おなかがすいて目が覚めるのだろう。

そうこうしていると、リジーやディーンが、グランを交え、なにやら騒ぎながら、キッチンにやってくる。アイリーンのようにコーヒーの準備をするためでなく、朝ごはんのメニューをチェックするためにである。

起床のラストを飾るのは、十中八九ジルだ。

「リジー、ディーン、悪いんですけど、ジルを起こしてきてもらえませんか？ちょっと手が離せなくて」

ジルを起こすのはキオにとって少々危険なので、適任の危険人物にお願いする。２人は、わーい、今日はどうやって起こそーう、などと言いながら、寝室に駆けていく。

しばらくすると、ジルの悲鳴が聞こえてくる。

何をされたのかは、想像しないのが１番。

朝食のほとんどは、キオが作る。

働き者の修道士は、朝の５時に起きているため、殺人鬼たちがもそもそと起きてきて、朝ごはんを食べる頃には、昨日の洗濯物は中庭に干されているし、簡単な掃除も終わり、空気の入れ替えもすんでいる。

食堂のテーブルの上は、適当に切ったパンを中心に、ボイルした鶏肉と生野菜のサラダ、玉ねぎのスープ、卵、ソーセージ、ふかしジャガイモ、季節の果物などがぎっしり並ぶ。

朝は一日の大事な源。不規則極まりない生活の猟奇殺人鬼たちも、ようやくキオと同等の生活スタイルを築きつつある。

「天にまします我らの父よ、日毎の糧を今日もお与えくださり、感謝します」

食前食後のお祈りは、絶対やらない殺人鬼たち。しかし、最近は、キオが祈り終わるまで、食べないよう気をつけている様子だ。

猟奇殺人鬼の観察を欠かさないキオは、最近、食事時の配膳や配置にも気を配っている。

例えば、パンの食べ方。

アイリーンはバターで、ジルはプレーン。リジーは蜂蜜のことが多く、ペーズリーはパンに卵やハムなど、色々挟むのが好きだ。グランは、ストロベリージャムを使うことが多い。ディーンは気分によってだが、パンを千切って丸めて食べるなど、遊び半分のことがしょっちゅう。（もちろんキオに注意される）

みんな寝起きということもあって、大抵は、問題なく進む。

しかし、稀（まれ）にみんなが無駄に元気だったとき、もしくは極端に機嫌が悪かったときなどは、いけない。こういう場合は、ちょっとしたことで、猟奇殺人鬼モードに入るので、キオは、すみやかにテーブルの下へ潜る。

「それよこせ」

「ヤダ」

リジーとディーンが、気に入りの惣菜をめぐって、睨み合っている。

なにやら、不穏な雰囲気……キオが止められる、レベル2を超えている。

彼は、食べかけのパンにサラダの残りを挟み、早々にテーブル下へ避難した。

「この前、ゆで卵あげたじゃん！よこせ！」

「そのかわり、デザートのプディングあげたじゃん！」

「キャラメルソースだけじゃん！」

「あそこが一番おいしいんじゃん！」

ガリガリガリと、フォークの突き刺さったチーズポテトウィンナーが、皿の上を行ったり来たり。

カシャン！

鋭く突き出されたナイフを、フォークが素早く受け止める。目に留まらない速さで、銀色の刃が飛んだ。リジーの大鎌が、ディーンのナイフを弾くが、それより先にディーンはその場から消えていた。もちろん、チーズポテトウィンナーもない。

「いただきまー」

「そうはいくか！」

空いた皿が、次々とディーンを追うが、なかなか当たらないのだろう。縦横無尽で陶器製品の割れる音が舞っている。しかし、そちらに気をとられていたディーンのフォークが、手から滑り落ちた。

「「あ！」」

それに、二人が手を伸ばし――

「おい、いい加減にしごふぁ」

ジル、リタイア。

「バカバカ！ちゃんと持ってろよ！」

「リジーが横から、あんなことするから落っこちたんじゃん！もう！」

落としたんだ……後で、キチンと叱っておかないと。

騒がしい席に苛立ちがピークに達したのか、アイリーンがテーブルを叩く。

「暴れるなっつてんでしょーが！この〇〇〇〇ども！〇〇〇野郎！〇〇！」

爽やかな朝にも関わらず、放送禁止用語だって飛び出す。

そうこうしているうちに、別の惣菜争奪戦に移ったようだ。

もう、それが食べたいというよりは、ほとんど意地だろう。しかし、どうやら、そのおかずを狙っているのは、ディーンとリジーだけではなかったようで……。

「しまった……！」

「……身体が、動かない」

リジーとディーンが、低い声で呟く。

オイオイ！なにか技が飛び出したの！？

「にゃーん」

ペーズリー！？ペーズリーが、なにか新技を出したの！？

気になったキオが、そろりとテーブル下を移動し、ペーズリーを見ようとすると。

「ひょわぁあああ！？」

突然、大鉈（おおなた）が厚い樫（かし）のテーブルを突き破ってきた。

どう刺激したんだろう……眠れる獅子のグラン参戦。

ガシャーンとかバリーンとか、途端に派手な音が激しくなる。

「アイリーン・ネルソン、あのときの借りを返させてもらおうか」

リジーが完全に本気。あのときって、どのときよ。

「やれやれ、お前とはやりあいたくないんだがな、グラン」
わりと早い段階で、リタイアしていたジルが復活したのか、参戦。
「同じ手は、もうくわないもんねーだ！」
ディーンは、対ペーズリーか。さて、どこから止めればいいんだろう。
キオは、テーブルの下で、パンをかじりながら、嵐が収まるのを待った。
殺し合いが本気で面白くなりだしたら困るが、今はまだ冗談半分のはずだ。
「あらあら、それで、互角のつもり？」「お手柔らかに願いたいんだがね」「原型を留めないほど切り刻んでくれる！」「ミエテナイバカ」「見えてないんじゃないもーん！」
「うごおおおあおあああああああ！！！！」
なんか、もう筆舌に尽くしがたい騒音。

しばらく好き勝手に暴れさせて、少しお互いに疲れが見え始めた頃に、キオは目覚まし時計をセットする。それは、最新式のもので、目覚ましベルのかわりに音声を吹き込むことができる。

設定時間を、現時刻にセットし、テーブルにそっと置く。

カチッ

音声が、再生される。

『おはようございます、愚民ども』

「「「「「女神いいいいいいいいいいいいいいいいッ！！！！！」」」」」

猟奇殺人鬼たちの怒りは一瞬ヒートアップするものの、大抵これでみんな我に返る。

女神の存在で、自分の状況を思い出すのである。

その後は、片付け。

いつも誰かがチョッカイをかけがてら、手伝ってくれる。大暴れしたときは、食堂の掃除もやらなくてはならない。これは、暴れた連中に任せる。

今日も怪我人ひとりなく、一日を始められた。

後片付けの終わったキオは、大きく伸びをする。

これが、修道士と猟奇殺人鬼の、朝の日常風景である。

第1楽章　夜の風景

１０月２７日（月）

コミュニケーションは大事だ。

相手を知るために、必要不可欠。

『キオの青春サヨウナラ日記』より

「ありえない」

アイリーンが、つぶやいた。

「……昨日は、子守唄を歌われたわ」

隣でディーンが、コーヒーに山盛り砂糖を入れている。

「オイラ、結構楽しかったよ？絵本いっぱい読んでもらった」

ジルは、しきりに、もうちょっとだったのに、と呟いている。何がもうちょっとだったのかは、聞かなくても分かるため、誰も尋ねない。

「発狂しそうだよ……これで４日目か」

リジーは豪快に紅茶をかき回し、味わいもせず一気飲み。

なんの話か。キオが、つい最近始めた「おやすみの挨拶」についてである。

今日一日どういうことをしたか、それは楽しかったのか、など小学生の子供に親が聞くようなことを延々聞かれ、眠れない場合は子守唄に突入する場合もある、危険な新習慣だ。

特に、アイリーンが気に入らないのは、「額にキス」。

これでは、完全に子供扱いである。

最初はアイリーンが、大人の女として余裕を見せていたのに、キオは一旦頭を切り替えると非常にストイックで、天然だ。

「どうにかペースを取り戻したいわ！」

ぐぐっと拳を握るアイリーン。

無断で縄張りに侵入してきた相手を威嚇するのは、当然である。相手が、敵意を示してくれれば、それだけこっちの士気もあがる。だが、相手があまりにも害がなく、悪意もない子ネズミだからこそ、みんな、どう追っ払っていいものやら悩んでいるのだ。

みんな、そんなに気に入らないなら、「来ないで」って言えば、キオは来ないと思うけど。

そうは思ったディーンだが、あえて言わずにおいた。

「次コレ」

「ディーン、これで5冊目ですよ？そろそろ、寝ないと」

「だって、眠くないんだもん」

まだ10時だし。

その夜も、やはりディーンは眠くなかった。

そもそも、今までは昼間眠って、夜起きていたのだから、そう簡単にリズムは直らない。

際限なく絵本を出すディーンを、キオは優しくたしなめる。

「そろそろ、みんなの様子も見てこないといけないし……ね？」

しかし、ディーンは、引き下がらない。他の5人が「挨拶」を不満に思っているのだから、その分自分といてくれればいいと考えているのだ。

「まだ、いてよぅ！」

つんつんと服をひっぱるディーン。

多分、ディーンの方がキオよりも年上なはずである。しかし、その仕草が、キオの父性愛というか、保護欲というか、そういう類のものをビシバシ刺激する。それで、ついつい、立ち上がる腰が重くなるキオである。

「じゃあ、もう一冊だけ」

しかし、その頃、他の5人は気が気ではなかった。時間には厳しいキオが、１０時過ぎても部屋に来ないのは、おかしい。

無論、ただ待っているだけの彼らではない。

夜の闇に乗じ、それぞれ動き出していた。

キオは、目をこすりながら、自室へと戻っていた。

あのあと、ディーンに３０分以上絵本を読まされてしまい、すっかりキオの方が眠くなってしまった。みんなの部屋に挨拶に行こうかとも思ったが、さすがに眠ってしまっているだろう。キオは遠慮す

ることにした。

「ところで、いつまでついてくるの、ディーン？」

キオの後ろには、枕を抱えたディーンが、ついてきている。

「今日は、キオと一緒に寝る！」

満面の笑顔を浮かべるディーン。

彼だってイイ大人のはず。それに、ひとりだけ甘やかすのは、不公平だ。

さすがに断ろうとすると、その気配を感じたのか、ディーンが持っていた枕に顔を埋めた。

「……だって、窓がガタガタいって、一人怖いんだもん」

くっそう、僕の父性愛め。僕の保護欲め。

「……もう、遊ばないで寝るんですよ？」

「うん！」

非情になりきれないキオは、あっさり承諾。思うツボである。

電気をつけていない室内は暗いが、暗いままで寝るのが苦手なディーンのために、テーブルランプだけつけてやる。

キオは、ディーンの枕を並べてやり、ぽんぽんと叩いた。

「約束どおり、おとなしく眠ってくださいね」

「うん、分かった！」

「それじゃあ、眠れるように、とっておきのピロートークを」

待て。

「なんで、ジルがいるんですか！？」

ジルは、別段悪びれもせず、白い歯をきらめかせ微笑んだ。（念のため記載しておくが、服は着ている）

「キオが、なかなか来ないから、途中で遭難したんじゃないかと思って、様子を見に来たんだ」

ベッドがやけに暖かい。結構長い間、ここにいたのでは。

いろいろ勘繰りたくなるキオ。

しかし、問い詰める前に、新たな敵が出現した。

「ふっふっふ、それで、出し抜いたつもりか、青髭」

声に顔を上げると、天井に張り付いた何者かが、高笑いをしている。

「うわぁ～……ヤモリみたいなのがいるよ、キオ」

ディーンに引かれてるよ、リジー。

「……なにやってるんですか？」

「キオが来ないから、途中で死んでるんじゃないかと思って、様子を見に来てあげたんじゃん！感謝しろぃ！」

何故、威張る。

リジーは、天井から降り立った。

「みんなで、パジャマパーティーか？ぜひとも混ぜてもらおう！」

白地に赤いイチゴ模様が踊る、可愛いパジャマで、胸を張るリジー。

どうやら、騒ぎに混ざりたいだけのようだ。

すると、キオの部屋の扉が、ノックされた。

「キオ、いるの？」

アイリーンだ。扉を開けた彼女は、盛大に眉をひそめる。

「なんだ、いるんじゃないの！」

アイリーンのネグリジェの裾を、しゃがんだペーズリーが握り締め

ている。ちなみに、アイリーン、元々全裸で寝ていたが、キオの強い薦(すす)めによりネグリジェの着用が、義務付けられた。

「アイリーンとペーズリーは、なんでここに？」

「キオが来ないから、途中でジルに拉致か、リジーに惨殺されたんじゃないかと思って見に来てやったんじゃないの！」

事例が、具体的すぎる。

「みんな、キオと一緒に寝たいの？」

ディーンの何気ない言葉に、アイリーンが眉を吊り上げる。

「違うわよ！そんな」

「私は寝たいよ」

「死ね！！」

理不尽にキレられるジル。

「じゃあ、グランの部屋行こうよ！一番ベッドが大きいし！」

「グラン、そこにいるよ」

リジーが指差した先、部屋の片隅に、大きな影が立っている。

「え？あれは、クローゼットで」

リジーが部屋の明かりをつけると、大きな大きなグランが浮かび上がった。

……えぇ、怖ッ！？……いえ、すいません……グランだったんですね……

本気でクローゼットだと思っていた、キオ。

「ねえ、グラン！グランのベッド使っていい？」

使う気満々のリジーが問うと、グランは頷いた。頷かざるを得ない状況を、きちんと汲み取る賢いグランである。早速、各々の枕を抱え、グランの部屋に移動することになった。もちろん、キオも同行させられている。

グランの部屋は、意外にも綺麗に片付けられており驚いた。というか、これが普通のベッドの状態なのだ。新聞紙やら綿やらを敷き詰めたペーズリーのベッドや、お菓子の袋がそこらじゅうから出てくるディーンのベッドや、枕元に凶器を並べられたリジーのベッドのほうが普通ではないのだ。

「なんか、修学旅行みたい！」

「じゃあ、怖い話しなくちゃ」

「あと好きな子の話も！」

すっかり旅行気分の6人は、グランのために特別に購入したキングサイズのベッドで、好き勝手に転がり始めた。全力で前転するリジーに、ペーズリーが轢(ひ)かれている。

「なに言ってるんですか。夜更かしはダメですよ。もう寝ます」
キオのセリフに、一斉にブーイングが飛ぶ。
「えーいいじゃん、センセー」
「誰が先生ですか」
「ひどーい！きびしーい！」
「厳しくないです！もう消灯時間は過ぎてるんだから、寝ます！」
リジーとディーンのセリフにつられ、ちょっとノってきているキオ。
「もうちょっとだけーあと１０分だけー」
「センセ　ジップン　チョウダイ」
ジルとペーズリーまで。
「……しょうがないですね……じゃあ、１０分だけ」
結局は折れるキオである。
なにはともあれ、修道士と猟奇殺人鬼の夜は、こうして更けていく。
翌日、ベッドで思い思いに休む彼らを、例の女神ボイスが叩き起こ

すことになる。

第1楽章　夜の風景（後書き）

いずれ、学園モノやっちゃいたいです。
多分、本編４楽章の制服事件あたりで差し込むことになるでしょう。

主人公は、明るさが取り柄、ちょっぴりドジな女学生★リジー。（大鎌込み）
気になる転校生★キオ。
顔を合わせると、すぐケンカになっちゃう幼馴染★ディーン。
寡黙だけど優しい、リジーと同じ図書委員★グラン。
成績優秀、生徒会長★ペーズリー。
カッコいいんだけど、謎が多い保健室の先生★ジル。
キオを巡って恋敵になっちゃった元親友★アイリーン。
諸悪の根源とも言うべき女校長★シアン。（↑女神様）

ごめんなさい。調子こきました。
星マークは……魔が差して、つい付けてしまったんです。初犯です。

番外編について

前回の話までで、交響曲でいう第1楽章部分は終了です。
次からは、第2楽章フランチャコルタ編に入ります。

ですが、その前に、番外編をやらせて頂こうと思っております。
楽章ごとにしょーもない番外編を入れてしまおう！と端から企んでいたからです。

ところで、多分、変奏曲を読んでくださっている読者様は、交響曲も読んでくださっているのではないかな、と思っております。なので、番外編に関しては本編に関係なく、（本来なら第４楽章に出てくる）ギルシア国家憲兵隊とかも書きたいんでございます。
書いてもよろしいでしょうか。ウズウズ。

というわけで、今後の変奏曲予定。

とある読者様から、お許しが出た「猟奇学園物語」。
「猟奇学園物語」の詳細は、前回後書きにて。

次に、２４日の日曜日（つまり今日）に、たまたま早く起きて見た、特撮モノに影響され生まれた「ケンペーレンジャー」。詳細は以下に記載。（ブログから持ってきました）

あと、「もし『猟奇殺人鬼の交響曲』がドラマだったら～ＮＧ編」とか。

とりあえず、最初の番外編は、「猟奇学園物語」でいきます。
楽章ごとに、こういうのが入りますので、ネタをお持ちのお客様は、三月までご一報くださいませ。
ぶっちゃけた話、しょうもなければ、しょうもないほどいいです。
いわゆるセルフパロディでございますので、「現代モノだったらどうよ！？」とか「パロディの王道は家族モノだろ！」とか、なんでもかまいません。
変奏曲ですので、三月の勝手（というか暴走）は、どうかご容赦くださいませ。
本編もキチンと書きますので！
交響曲第５楽章を書きあげてから、更新しようと思っております。

【ギルシア戦隊ケンペーレンジャー】

普段はギルシア国家憲兵隊だけど、軍章の不思議な力でケンペーレンジャーに変身！
燃える闘魂★ケンペーレッド・スコール。
冷静沈着★ケンペーブルー・フェンリル。
大佐大好き★ケンペーイエロー・レト。
目立たない眼鏡★ケンペイーグリーン・ハティ。
もう帰りたい★ケンペーブラック・マーナガルム。

ジェボーダンは、秘密司令室の司令官とか、そんなんです。

敵は、世界征服を企む、純真な暗黒大帝キオと、その配下の将軍たち。

暴食と誘惑の魔女★灰かぶり。

冷酷な黒薔薇の騎士★青髭。

猜疑心と偽りの指揮者★笛吹き男。

破壊を司る真紅の小悪魔★赤頭巾。

死と再生の冒涜者★長靴を履いた猫。

グランは、怪物です。あの、ビルとか潰す大きい奴です（扱いがひどい）

なんか、もう……やりたい放題ですね。交響曲との兼ね合いもあるので、この話は、できるだけ、第４楽章後の番外編に持って来ようと思います。

番外編について（後書き）

やっちまったなぁっていう自覚はあるんです……えぇ……どうか、生暖かい目で見守ってやってください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5434d/

猟奇殺人鬼の変奏曲

2010年10月14日21時41分発行